

An abstract painting with a textured, layered appearance. The colors are muted and earthy, including shades of grey, brown, ochre, and hints of red and blue. The brushstrokes are visible, creating a sense of movement and depth. The overall composition is non-representational, focusing on color and texture.

Zephyros⁹⁷

国立西洋美術館ニュース

ゼフュロス

ISSN 1342-8071

テート美術館 ターナー展 ― 崇高の絵画、現代美術との対話

会期：2026年10月24日[土]－2027年2月21日[日] | 会場：企画展示室



1



2



3

- 1 J.M.W. ターナー 《グリゾン州の雪崩》1810 年展示
油彩/カンヴァス テート美術館 Photo: Tate
- 2 J.M.W. ターナー 《捕鯨船エレバス号に万歳！ もう一頭獲ったぞ！》
1846 年展示 油彩/カンヴァス テート美術館 Photo: Tate
- 3 表紙（部分） J.M.W. ターナー 《荒海とイルカ》1835-40 年頃
油彩/カンヴァス テート美術館 Photo: Tate
- 4 オラファー・エリアソン《溶ける氷河のシリーズ 1999/2019》2019 年
C プリント（30 組） テート美術館 © 2019 Olafur Eliasson
Photo: Tate
- 5 オトリス・グループ《Hydra Decapita（ヒュドラの斬首）》2010 年
HD ヴィデオ、プロジェクション、カラー、サウンド テート美術館
Courtesy and copyright The Otolith Group. Photo: Tate
- 6 マーク・ロスコ《無題》1969 年 アクリル/紙 テート美術館
© 2026 Kate Rothko Prizel & Christopher Rothko / ARS,
New York / JASPAR, Tokyo E6377 Photo: Tate

遠き過去の画家が描いた絵たちが、こんにちのわれわれにとって未知であるものを潜在させている——J.M.W. ターナー(1775–1851年)の作品をまねにすると、そのような感覚を抱かせられないでしょうか。かつてジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは、ターナーには「永遠の未来から私たちに到来するもの、あるいは永遠の未来へと逃れてゆくもの、そういう何かがある」(『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂症』[上] 宇野邦一訳、河出文庫、2006年、253頁)と書きました。ターナーの芸術は、過去を証言してくれるのはもちろんのこと、まさに未来を想像し、思考するための契機を、われわれにくれるでしょう。

昨年、2025年に生誕250周年を迎えた、英国絵画史上でもっとも偉大な画家ともみなされるターナーは、移ろう光や大気、荒れ狂う海や空、また産業革命期に人間が排出しはじめた蒸気や煤煙など、この世界の一定ではない諸相をときに克明に、ときに抽象化して描きだしました。彼は絵画の可能性をきわめて実験的に拡張し、その歴史に新地平を切り拓いた、まぎれもない変革者だったといわねばなりません。そしてこの画家の作品は、18世紀後半にエドモンド・パークやイマヌエル・カントらの哲学者によってさかんに議論され、その後のロマン主義の芸術の関心事となっていた「崇高」を見る者に経験させるものとして評価されてきました。

この展覧会は、世界最大のターナー・コレクションを誇るロンドンのテート美術館の所蔵品から、油彩画や水彩

画など、80点以上をご紹介します回顧展です。ターナーの作品群をテーマごとに再編し、ゆるやかな時系列に沿って展示します。もっとも、そればかりではありません。本展では、ターナーが描いたものと戦後ないし現代の芸術作品を各章で併置して対話させることをつうじて、その過去の画家の問題意識が時空を超えて後世のアーティストたちの関心とも響きあうことを浮き彫りにします。そのような展示法を21世紀に国際的に主導してきた機関のひとつが、ほかならぬテート美術館だったといえます。

たとえば、20世紀後半に「抽象的崇高」なる概念とともに語られたアメリカの抽象表現主義の画家たちのターナーにたいする意識を検証します。はたまた、地球環境をしばしばテーマ化してきたオラファー・エリアソン(1967年–)の作品を差し挟むことで、ターナーが生きた産業革命期に端を発するともいわれる気候変動の問題に眼を向けます。さらには、ターナーの絵画に触発されたラディカルなアーティスト集団、オトリス・グループ(2002年結成)が、すぐれて高度な思考とSF的な想像力によって作りあげた映像作品——「エッセイ・フィルム」と呼ぶべきもの——を介して、過去の西洋の植民地主義や奴隷貿易を批判的に想起するとともに、こんにち、グローバルに共有されていながらもいまだ解消されてはいない、芸術における脱植民地化や資本主義の再考といった諸課題に迫ります。そう、ターナーはわれわれに、この世界の未来を想像し、思考せよ、と告げているはずなのです。

[国立西洋美術館主任研究員 新藤淳]



4



5



6

劇場をめぐるイメージ―ドラクロワ、ドーミエから

トゥールーズ＝ロートレック、クリンガーまで

会期：2026年10月20日[火]―2027年1月11日[月・祝]

会場：版画素描展示室

19世紀のパリをはじめとする大都市では、多様な劇場が人々の生活に生彩を与えていました。画家たちもまた、公式の大劇場から庶民的あるいは実験的な小劇場、大衆娯楽のカフェ・コンセールまで足しげく通い、豊かな画題を引き出しています。本展ではフランスの画家たちによる版画や素描を中心に、当時の劇場や舞台をめぐる多彩な作品を展覧します。

ロマン主義の時代、ドラクロワやシャセリオーは、シェイクスピアやゲーテの戯曲にもとづく版画連作を手がけました。実際の舞台効果と画家の想像力が融合したこれらの作品は、いわば書斎での私的な観劇を可能とするものでした。一方、公共の劇場空間に社会の縮図を見たドーミエは、客席や舞台袖での人間喜劇を活写しながら、劇場の観相学ともいべき風刺画を次々に発表します。つづぐドガやロートレック、フォランたちも、舞台上で演じる俳優の姿だけでなく、舞台裏での踊り子とパトロンの駆け引きなど、明暗入り混じる劇場の現実をとらえています。

世紀末に近づく、出版法の改正や多色刷リトグラフの普及を背景に、劇場と画家は協働して、従来の商業印刷物を芸術の域に押し上げようと試みました。この動きのなか、街角で目を引く大胆なポスターや、演目を独創的に解釈したプログラム挿絵が生み出されます。同じころ、ヴァーグナーによる総合芸術としての楽劇に触発された画家たちが各国に現れ、このドイツの作曲家に關係する作品を残しました。また、舞台におけるジャポニスムも看過できません。多彩な作品が会する本展にて、19世紀に花開いた劇場文化を追体験していただけたなら幸いです。

〔国立西洋美術館主任研究員 袴田紘代〕



オノレ・ドーミエ「劇場のクロッキー」：(4) 舞台監督「いくら君が王様役だからといっても、1フラン50の罰金には変わらないな、なにしろ君は出をしくじったんだから」
1856年 リトグラフ 国立西洋美術館

【特集展示】「昭和100年」昭和時代 当館における保存修復の変遷

―ゴッホ《ばら》、ルノワール《帽子の女》を例として―

会期：2026年6月30日[火]―2027年1月11日[月・祝]

会場：本館1階19世紀ホール



会場撮影 © 上野則宏

2026(令和8)年は、1926(昭和元)年から起算して満100年となります。昭和時代は、激動や苦難に始まりましたが、復興と成長をもたらした時代でもあります。日本政府内閣官房が推進する「昭和100年」関連施策を受け、当館でも特集展示を行うこととしました。

第二次世界大戦後、当館の根幹をなす松方コレクションが日本政府に寄贈返還された時には、コレクションは決して状態の良いものばかりではありませんでした。大戦中、コレクションはパリに留め置かれ、パリの戦況が悪化した際にはパリ郊外の農村の納屋に疎開された作品群もあり、特に疎開先の保存環境があまり良くなかったと推測されます。作品にとって適切とはいえない環境に永らく保管されていたことで、作品の汚損や劣化が著しく進んだと考えられます。

しかしながら、現在、来館された皆様ご覧になっている作品は、展示や鑑賞に十分堪える状態です。開館時の汚損や劣化が進んだ作品状態から、現在のより良い状態に至るには、どのような歴史を経てきたのでしょうか。

当館は国立美術館の中でも唯一保存修復室と保存科学室を有しており、職員全体で作品を最大限に展示活用するための努力を続けています。この特集展示では、当館の特徴的な活動の一つである保存修復分野に焦点を当て、その活動と変遷を貴重なアーカイヴ資料の展示を通して振り返ります。

所蔵作品を代々守ってきた美術館の裏方の仕事を知っていただく機会となれば幸いです。

〔国立西洋美術館主任研究員 邊牟木尚美〕

再びめぐり合う山村コレクション

本作は、自然に基づく象徴的な記号によって詩情豊かな独自の絵画世界を築いたミロの円熟期を代表する作品で、山村家寄贈の「山村コレクション」の一点です。

兵庫県出身のコレクター、山村徳太郎（1926-1986）氏は、母・山村ハル氏とともに1955年頃から国内外の近現代美術作品の収集を始め、母の遺志に従い、1965・67年度にミロのほかデュBuffe、ポロックなど計8点の西洋美術作品を当館に寄贈しました。これらの作品は、フランス近代美術が中心であった当館の収集・展示対象を欧米の戦後美術にまで広げるとともに、現在も20世紀美術コレクションの中核として常設展の最後を飾っています。山村氏の没後には、戦後日本の前衛美術約170点が兵庫県立近代美術館（現・兵庫県立美術館）に一括収蔵されました。

この秋、国立美術館連携事業「コレクション・ダイアログ」の一環として、兵庫県立美術館で「松方幸次郎×山村徳太郎 蒐集のパッション——ロダンを日本へ、具体を世界へ」展（2026年10月10日〔土〕—12月27日〔日〕）が開催されます。兵庫ゆかりの二人のコレクターに焦点を当てる本展では、当館所蔵の松方コレクションに加え、ミロ《絵画》をはじめとする山村氏旧蔵作品5点が出品され、初めて兵庫への「里帰り」を果たします。山村氏が初期に集めた西洋のモダンアートと、その後収集に力を注いだ日本の現代美術の作品が一堂に会する貴重な機会となるでしょう。

〔国立西洋美術館特定研究員 久保田有寿〕



ジョアン・ミロ《絵画》1953年 油彩/カンヴァス 国立西洋美術館 山村家より寄贈
© Successió Miró / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 G4411

世界遺産登録10周年事業

7ヵ国17資産で構成される「ル・コルビュジェの建築作品——近代建築運動への顕著な貢献——」が、世界遺産一覧表に記載されてから10年を迎えた2026年7月、世界遺産10周年特設サイトを開設しました。本館の歴史やル・コルビュジェ建築作品の魅力を感じていただけるよう、写真家・瀧本幹也氏と国立西洋美術館・田中正之館長の対談や旧館長室の特別公開などのイベントを実施し、大変多くの方にご参加いただきました。

特設サイトでは現在も、ル・コルビュジェや本館をテーマとした関連商品やデジタルコンテンツをご紹介します。是非、引き続きお楽しみください。

〔国立西洋美術館主任研究員 福田京〕



7月18日〔土〕対談「ル・コルビュジェ 建築・身体・眼差し」撮影 大津裕貴



特設サイト

「美術館でクリスマス」 ——人と人、人と作品をつなぐプログラム

「美術館でクリスマス」という企画をご存じでしょうか。多様な方にとって当館がより身近な場となることを目指し、約20年前に始まった季節プログラムです。当初の目的を受け継ぎ、内容を更新しながら継続してきました。今年も11月下旬より、多彩なプログラムを開催します。

「みんなのクリスマス・キャロル・コンサート」では、会場を明るく保ち、お子様や障害のある方にも安心してご参加いただける環境を整えます。「ボランティア」は、来館者との架け橋となるボランティア・スタッフが企画する気軽に立ち寄れるワークショップです。そのほか、キリスト教作品を交えたギャラリートーク（手話通訳あり）、視覚に障害のある方と楽しむ鑑賞ツアー、研究員による冬季限定音声ガイド、常設展が無料となる「Kawasaki Free Sunday」なども予定しています。

多様性や共生の大切さが見直される今、本企画の意義も深まっていると感じられます。今年も、人と人、人と作品を優しくつなぐひとときとなることを願っています。

〔国立西洋美術館特定研究員 白濱恵里子〕

*事前申込が必要なプログラムもあります。
詳細は公式ウェブサイトをご確認ください。



〔CAFÉ すいれん〕

営業時間：10:00-17:30（食事11:00-16:45 L.O. | 喫茶10:00-17:15 L.O.）／金・土曜日10:00-20:00（食事11:00-19:10 L.O. | 喫茶10:00-19:30 L.O.）

※ 食事の提供時間は時期により早まる場合があります。詳しくは館内の掲示をご確認ください。

〔ミュージアムショップ〕

内藤コレクション彩飾写本のアクセサリーが新登場。彩飾写本3点を元にしたピンズで、13世紀フランスの《聖書零葉》からは頁の下之余白に描かれた鹿を追う獵犬の姿を、12世紀南ネーデルラントの《詩編集零葉》からは行末に描かれたドラゴンを、13世紀頃の南ネーデルラントの《『ギステルの時待書』零葉》からはテキストを囲む棒状の装飾の先端に描かれたグリフィンとライオンの顔を、それぞれモチーフにしました。

写本といえば、繊細な装飾模様や文字の美しさに加え、どこかユーモラスな人物や動物の表情も人気の一つ。そうした表情を生かすよう細部にこだわり、立体にしました。大きさはそれぞれ1.5～4センチほどで着けやすく、個性的な存在感のある一品です。

モチーフとなった写本3点は、作品選「文字と絵の小宇宙」にも掲載されています。あわせてお楽しみください。

- 1,2
国立西洋美術館所蔵
内藤コレクション 写本ピンズ
〔左から〕
ライオンの頭 正面、
グリフィンの頭 横、獵犬、ドラゴン
各 2,800円（税込）
- 3
内藤コレクション写本リーフ作品選
「文字と絵の小宇宙」
2,300円（税込）



1



2



3

オンラインショップ
<https://www.nmwatokyo-shop.org>



ミュージアムショップ公式 Instagram
@nmwatokyo_shop



展示カレンダー〔常設展示／企画展示〕2026年9月－2027年2月

9月 [Sep.]	10月 [Oct.]	11月 [Nov.]	12月 [Dec.]	1月 [Jan.]	2月 [Feb.]
常設展					
【特集展示】 －9月23日〔水・祝〕 クロード・モネ没後100周年 【小企画展】 －10月12日〔月・祝〕 神話、寓意、祝祭―― ルネサンスからバロックに おけるイタリア宮廷と版画 【企画展】 －9月23日〔水・祝〕 版画家レンブラント 挑戦、継承、インパクト	【特集展示】 －2027年1月11日〔月・祝〕 「昭和100年」昭和時代 当館における保存修復の変遷 ―ゴッホ《ばら》、ルノワール《帽子の女》を例として― 【小企画展】 10月20日〔火〕－2027年1月11日〔月・祝〕 劇場をめぐるイメージ―― ドラクロワ、ドーミエからトゥールーズ＝ロートレック、クリンガーまで 【企画展】 10月24日〔土〕－2027年2月21日〔日〕 テート美術館 ターナー展――崇高の絵画、現代美術との対話				
	常設展のみ閉室 1月12日〔火〕→2月21日〔日〕				
	全館休館 9月24日〔木〕↓9月30日〔水〕				
	全館休館 2月22日〔月〕↓3月19日〔金〕				

〔開館時間〕9:30-17:30（毎週金・土曜日9:30-20:00）＊入室は閉室の30分前まで

〔休館日〕月曜日（月曜日が祝日又は祝日の振替休日となる場合は開館し、翌平日休館）、展示替期間、年末年始、臨時休館日

〔臨時開館・臨時休館等のお知らせ〕臨時休館：10月23日〔金〕

展示替え休館：9月24日〔木〕－9月30日〔水〕、2027年1月12日〔火〕－2月21日〔日〕（ただし、企画展は開室）、

2月22日〔月〕－3月19日〔金〕 | 年末年始休館：12月28日〔月〕－2027年1月1日〔金・祝〕

〔常設展無料観覧日〕10月11日＊、11月3日（文化の日）、11月8日＊、12月13日＊、2027年1月10日＊

＊当館オフィシャルパートナー・川崎重工工業株式会社の提供による「Kawasaki Free Sunday」（原則毎月第2日曜日）

＊展覧会名、会期、展示内容等は変更の可能性があります。最新の情報は国立西洋美術館公式サイトをご確認ください。

〔常設展〕

国立西洋美術館は、松方コレクションが核となって1959年に設立された、西洋の美術作品を専門とする美術館です。

中世から20世紀にかけての西洋絵画と、ロダンをはじめとするフランス近代彫刻などを本館、新館、前庭で年間を通じて展示しています。

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art

〔東京・上野公園〕

国立西洋美術館

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

公式サイト <https://www.nmwa.go.jp/>

お問い合わせ 050-5541-8600（ハローダイヤル）

〔国立西洋美術館 SNS 公式アカウント〕

X・Instagram・YouTube @NMWATokyo

Facebook @NationalMuseumofWesternArt

こちらから
バックナンバーを
読むことができます



Zephyros 97

ゼフュロス第97号 | 編集・発行：国立西洋美術館／2026年9月14日（年3回発行） | 協力：公益財団法人西洋美術振興財団 | デザイン：木村稔将
「ZEPHYROS」（ゼフュロス）はギリシャ神話の神々のひとり、西風を司る神様の名前です。西欧では暖かさや色さまざまな花々を運ぶ春の風をさします。